ヴィルトゥオーゾ・カルテット

1部

弦楽四重奏曲 第77番 ハ長調 Op.76-3 Hob.Ⅲ-77「皇帝」 …… ハイドン

弦楽四重奏曲 第12番 ヘ長調 Op.96「アメリカ」 …… ドヴォルザーク

2部

弦楽四重奏曲 第15番 イ短調 Op.132 …… ベートーヴェン

秋

2013 四季のコンサート 30周年記念

2013年10月27日(日)18:45開演
会場:浜松市教育文化会館
主催:浜松音楽友の会

プロフィール

日本を代表するヴィオラ奏者の一人、店村眞積の呼びかけで結成されたスーパーカルテット。バルトークの弦楽四重奏曲全6曲の演奏制覇を目指して活動を開始。メンバーは日本のオーケストラの顔ともいえる精鋭4名から成り、高度なテクニックで深遠な音楽を紡ぐ。白寿ホール「リクライニング・コンサート」シリーズでは、6年間にわたり、バルトークの全6曲の弦楽四重奏曲を達成し高い評価を得た。本格派の弦楽カルテットとして注目を集めている。今回の浜松公演ではオリジナルメンバーの藤森亮一に代わり、同じくN響の精鋭チェリスト村井将を迎える。

齋藤 真知亜(第1ヴァイオリン)
東京藝術大学を首席卒業、1986年NHK交響楽団に入団。99年からは自主企画リサイタルを毎年開催し好評を得ている。「Matthias Musicum Ensemble」「Matthias Musicum Quartett」を結成し、合奏団・弦楽四重奏の活動を全国展開している。NHK交響楽団第1ヴァイオリン・フォアシュピーラー。

大宮 臨太郎(第2ヴァイオリン)
桐朋女子高等学校(共学)を首席で卒業後、桐朋学園大学に進学。在学中にNHK交響楽団のオーディションに合格。2004年より活動を始め、現在、NHK交響楽団第1ヴァイオリン・フォアシュピーラーを務める。若手ヴァイオリニストとして注目を集め、ソロ、室内楽など幅広く活躍している。

店村 眞積(ヴィオラ)
1984年-2001年、読売日本交響楽団ソロ・ヴィオリスト、2001年-2011年までNHK交響楽団ソロ首席ヴィオラ奏者を歴任。また、霧島国際音楽祭、サイトウ・キネン・オーケストラなどでも活躍。現在、東京都交響楽団特任首席ヴィオラ奏者、京都市交響楽団ソロ首席ヴィオラ奏者。桐朋学園大学特任教授。東京音楽大学教授。

村井 将(チェロ)
1991年東京藝術大学卒業。在学中の1987年、第56回日本音楽コンクール2位入賞。神戸室内合奏団首席チェロ奏者、新星日本交響楽団首席チェロ奏者、東京フィルハーモニー交響楽団首席チェロ奏者を経て、現在NHK交響楽団チェロ奏者。

ヴィルトゥオーゾ・カルテット

VIRTUOSO STRING QUARTET

曲目解説

真嶋 雄大

●ハイドン(1732~1809)／弦楽四重奏曲 第77番 ハ長調 Op.76-3 Hob.Ⅲ-77「皇帝」

現存する最古の弦楽四重奏曲は、18世紀初頭にイタリアのA.スカルラッティが書いたとされている。その形態はタルティーニやボッケリーニなどに受け継がれ、やがてはハイドンに辿り着く。当時のウィーンは、それまで宮廷だけのものだった音楽が、貴族社会にも広がっていた。貴族たちは音楽にステイタスを見出し、皇帝を真似て自らの楽団を抱えた。ハイドンが30年近くも仕えたエステルハージ侯も例外ではない。

ハイドンの弦楽四重奏曲は、ブレイエル他の全集には83曲が納められており、ホーボーケンによる番号もそのまま採り入れられたが、そこには偽作も含まれており、現在オリジナルの弦楽四重奏曲は68曲とされている。

その後1790年代に入っての2度にわたるイギリス公演は大成功を収め、ハイドンは富と名声を手中にし、1795年には一旦は離職したエステルハージ家の楽長に再就任、その頃6曲の「エルデーディー四重奏曲Op.76」を書いた。この弦楽四重奏曲群はその名の通り、ヨーゼフ・エルデーディー伯爵の依頼で作曲され、伯爵に献呈された。そして伯爵の同意を得て1799年に出版されたのである。

その第2番は「五度」、第4番は「日の出」とタイトルされ、第5番は「ラルゴ」の愛称がある。そして第3番が「皇帝」であり、それは第2楽章カンタービレがハイドン自身の書いたオーストリア国歌（現ドイツ国歌）「神よ、皇帝を護り給え」の主題を用いた変奏曲となっていることに由来している。第1楽章アレグロは、G-E-F-D-Cという音型で始められ、これは、"Gott erhalte Franz den Kaiser（神よ、皇帝フランツを守り給え）"の頭文字となっている。第3楽章はメヌエット、第4楽章フィナーレはプレスト。

●ドヴォルザーク(1841~1904)／弦楽四重奏曲 第12番 ヘ長調 Op.96「アメリカ」

既に作曲家としての世界的名声を確立していたドヴォルザークは、ニューヨークで国民音楽院を設立したジャネット・サーバー夫人に招聘され、アメリカに渡る。1892年、ドヴォルザーク51歳のときであった。その後音楽院院長として3年間を過ごしたが、それはドヴォルザークにとって作曲活動が著しく充実した時期でもあり、この作品をはじめ「交響曲第9番《新世界より》」や「チェロ協奏曲」など数々の傑作が生み出されている。

ドヴォルザークがこの「弦楽四重奏曲第12番《アメリカ》」のスケッチに着手したのは《新世界より》を書き上げた後の1893年6月8日、そして何と2日後にはスケッチを終え、同月12日から23日までに完成させているのである。場所はアイオワ州にあるチェコの移民の村スピルヴィルであり、その姉妹作「弦楽五重奏曲第3番」をも書き上げている。

ドヴォルザークは滞米中、アメリカ・インディアンの語法や黒人霊歌などに触れ、大いにインスピレーションを得たが、と同時にアメリカで創作した楽曲は自身の故郷ボヘミアへのノスタルジーと共感に満ち溢れている。

第1楽章は、五音音階が用いられた郷愁漂う楽章で、第2楽章はしっとりとしたボヘミアの民族素材に基づいた、きわめて抒情的な緩徐楽章。鳥の啼き声を模したとも言われる第3楽章スケルツォに続く第4楽章ロンドは快活で、中間部には実に美しいコラール風の旋律が置かれている。

●ベートーヴェン(1770~1827)／弦楽四重奏曲 第15番 イ短調 Op.132

ウィーン古典派の産物ともいうべき弦楽四重奏を、ハイドンやモーツァルト以降、さらに発展させて拡大、熟成させたのがベートーヴェンである。その創作初期、ベートーヴェンの交響曲と弦楽四重奏曲に対する取り組みは、慎重の上にも慎重を期した。古典音楽の伝統、新作への過度の期待などを十分に理解していればこそであるが、それゆえベートーヴェンは、実験的な室内楽に幾つも挑戦し、その最終的な目標に弦楽四重奏曲を据えたのである。

その弦楽四重奏曲を、ベートーヴェンは作品番号を付したものだけで16曲、「大フーガ」を加えれば17曲遺した。第1番から第11番「セリオーソ」までは1800年からの10年間に書き上げ、その後のほぼ15年、ベートーヴェンは弦楽四重奏曲の創作から一旦は遠ざかった。そして第12番から以降の弦楽四重奏曲が作曲されたのは1825年前後であるが、その頃にはベートーヴェンは既に交響曲第9番、ピアノ・ソナタ全32曲などを完成させていた。復活の原動力となったのは、ガリツィン侯爵からの依頼とヴァイオリニスト、シュパンツィヒとの再会である。シュパンツィヒはベートーヴェンの親友であり、最良の音楽的解釈者であったが、仕えていたラズモフスキー侯爵が没落したため、ロシアなどで演奏活動を続けていたのである。

この第15番を書いた1825年4月頃、ベートーヴェンは病に倒れた。それも深刻な症状であったため、回復してこの作曲に臨んだ時、第3楽章に長大な緩徐楽章「病癒えた者の神への聖なる感謝の歌」を置いたのである。強烈なメッセージ性を湛えたこの作品は、基本楽想が発展、回想を繰り返し、革新性と統一性をもって最終第5楽章へと収斂する。ベートーヴェン最高傑作のひとつである。

（ましまゆうだい・音楽評論家）